



好学愛知 自律敬愛 質実剛健

鶴丸イ言

鹿児島県立鶴丸高等学校

〒890-8502 鹿児島市薬師二丁目1番1号

TEL 099-251-7387 FAX 099-255-3433

http://www.edu.pref.kagoshima.jp/sh/Tsurumaru/top.html

11・12・1月の行事予定

11月	
30月	卒業考査(1日目)
12月	
1火	卒業考査(2日目) 中間考査(1日目)
2水	卒業考査(3日目) 中間考査(2日目)
3木	卒業考査(4日目) 中間考査(3日目)
4金	1・2年クラスマッチ 3年木曜の授業
5土	悠学講座⑥
7月	全校朝会
10木	学校安全の日
11金	
13日	郷中ゼミ(2年)
14月	学年朝会 職員会議
19土	悠学講座⑦
21月	全校朝会
23日	天皇誕生日
24木	大掃除 実力考査時間割発表
25金	冬季悠学講座
28月	冬季悠学講座
29火	3年センタープレ
30水	3年センタープレ
31木	
1月	
1日	元日
4月	3年センタープレ
5火	3年センタープレ
6水	3年センタープレ
7木	3年センタープレ
8金	授業開始日 全校朝会 中掃除 職員会議

二〇一八(平成三十年)年、「明治維新」から一五〇周年という節目を迎える。この明治維新によって江戸幕府の体制が崩壊し、以後、近代国家の形成が進むこととなる。薩摩藩は明治維新の主な原動力となった。この節目にあたり、本県では、明治維新までの激動の時代を歩んできた薩摩藩の足跡を振り返る、様々な取り組みが実施されている。しかし、これからお話するのは、その明治維新のことではなく、江戸時代のことである。一見すると「派手」な明治維新と比較して、江戸時代について、皆さんはどのようなイメージをお持ちだろうか。



江戸時代には、「暗黒の時代」というイメージがつきまとう。今まで目にしてきたテレビや映画などの時代劇、ひよつとすると学校教育のなかで定着してきたイメージなどではないか。江戸時代は、二六〇年近く、全国が統一的に支配された時代であり、確かにそれを支える細かな制度が整えられた。手元にある日本史の教科書や図説にも、その詳細が記されている。

しかし、こうした制度は、為政者の側が意図的に作りあげたものである。従って、これだけをもとにして、その時代のイメージを形成するのは極めて難しいし、社会の実態

とかけ離れている場合も多いのである。十九世紀初頭、世田谷の百姓たちが訴訟事件を起こした。百姓たちは、村の指導者とのトラブルに理不尽な裁きが下されたことに怒り、藩主に直訴しようとした。この直訴の揉み消しを疑う百姓たちが、何のゆかりもない隣接する藩の屋敷にも訴状を投げ込んで情報を探る。クしたり、目安箱などにも同様の訴状を持ち込んだりと情報戦を展開する。結局、再審が行われることとなり、百姓たちは事実上の勝訴を勝ち取った。国立歴史民俗博物館名誉教授の高橋敏氏は、不正に対して断固として闘う「物言う百姓の姿」を、このように明らかにされている。

また、群馬県にある縁切寺満徳寺資料館名誉館長の高木侃氏は、江戸時代の女性の地位について、「三くだり半」と呼ばれた離婚状をもとに詳細に検証された。そもそも三くだり半というのは、離婚の際に夫から妻に発行される離婚状であることから、「妻が夫に捨てられる」というイメージが強い。しかし、そうした理解では説明出来ない事例もたくさんあるというのだ。例えば、養蚕や機械で現金収入を得て一家の稼ぎ頭として夫を養う妻。三くだり半を突きつけられても全く怯むことなく家に居座る妻。夫の意に反して家を飛び出す妻。夫を逆に追い出した。嫌がる夫に無理やり三くだり半を書かせる妻など、豊かな経済力を背景に男性と対等の力を持ち、したたかに、時にはちやっかりと、そして生き生きと過ごす江戸の女性の姿を、高木氏は明確に分析された。

教科書の「行間」は面白い。未知の部分はまだ隠されている。大学は、この「行間」を求める場である。だから大学は楽しいのだ。自分の興味・関心に従い、心の赴くままに「行間」に迫って欲しい。しかし、この「行間」を最大限に楽しむためには、「本文」の十分な理解が

今年度は、伝統芸能である落語を鑑賞した。寄席入門から始まり、江戸で発展した「東」の落語と大阪を中心に発展した「西」の落語がそれぞれ披露され、色物とよばれる曲芸、そして最後に「東」落語で「お開き」というプログラムであった。「ときそば」や「目黒のさんま」など、まさに伝統の落語が披露され、生徒は伝統に裏打ちされた話芸の世界に笑いとともに、引き込まれていた。

鑑賞後は、一・二年生が三年生全員に激励の思いを込めて作成した「三激カード」が贈られた。それに対して、三年生代表の西莉可子さん(三三R)が激励へのお礼と



絶対には欠かせない。「不可逆」な鶴丸での三年間、「をくしく、直く」「ひたすら」に高校での学びを深めてもらいたい。

十月二十八日午後、宝山ホールにおいて三年生を激励する会(通称「三激会」)が開催された。この会は、全校生徒で芸術鑑賞をする機会を設けるとともに、進路実現に向けて日々努力を重ねている三年生を、一・二年生が応援する行事である。

今年度は、伝統芸能である落語を鑑賞した。寄席入門から始まり、江戸で発展した「東」の落語と大阪を中心に発展した「西」の落語がそれぞれ披露され、色物とよばれる曲芸、そして最後に「東」落語で「お開き」というプログラムであった。「ときそば」や「目黒のさんま」など、まさに伝統の落語が披露され、生徒は伝統に裏打ちされた話芸の世界に笑いとともに、引き込まれていた。

鑑賞後は、一・二年生が三年生全員に激励の思いを込めて作成した「三激カード」が贈られた。それに対して、三年生代表の西莉可子さん(三三R)が激励へのお礼と

ともに、「『兆し』を自らの『手』で掴み取り、『挑む』姿勢を忘れず三年生それぞれが目標に邁進します」と力強く決意を語っていた。

進み、学歴の有無や出身大学や性別、国籍すらも自分の一生を決める要素にはならない」とも語り、自分が何者なのかという問いを常に掲げ、世界の多様な人々と交流し、自分を磨き続ける大切さも語ってくれた。その際、人脈を創る唯一の道は「他人のために骨を折ること」であると説かれた。骨を折るほどの痛みが伴うほど相手のために尽くさねば、人脈などは作れないという意味でこの言葉を使われているとのことであった。

当日は天候にも恵まれ、絶好のコンディションのもと秋の桜島路を、男子は10km、女子は5kmを駆け抜け、それぞれが自己ベスト更新に挑んだ。今年度は、一年男子の山口賢助さん(一六R)が、二十一年ぶりに新記録(三二分五秒)を樹立した。また、今年度から、学級ごとの成績も発表され、二年生は二二Rが、一年生は一五Rが、それぞれ初の栄冠に輝いた。個人成績の三位までは以下の通り、

- 二年 男子
- 一位 福本 祥史(二八R)
- 二位 山田 剛士(二二R)
- 三位 井上 八雲(二二R)
- 二年 女子
- 一位 児島 美聡(二二R)
- 二位 永田 小百合(二八R)
- 三位 伊賀南子(二七R)

十一月十四日、本校体育館において文化講演会が開催された。今年度の講師は、株式会社アジア戦略本部、代表取締役社長田中秋人氏をお招きし、「拓こう 日本未来 アジアの未来」アジアの人々とともに」という演題で講演をいただいた。田中氏が企業人として培った、経験に裏付けされたお話に生徒は強く感銘を受けているようであった。田中氏は講演の中で、今「大企業」と呼ばれる企業も、みんな最初は極めて小さな存在からの出発であったことを語り、「早すぎる失敗はあっても、遅すぎる失敗はない」という言葉から、一見すると閉塞し、もはやチャンスなど残っていないような場であっても、挑戦するものには必ず等しく成功の機会が準備されているとおっしゃった。先行したものが有利であるとは限らないため、チャレンジすることが重要であるとおっしゃっていた。また、「現在の『チャンピオン』は十年後の『チャンピオン』ではないかも知れません」と語り、時代を見据え、起業する志の重要性も説いてくださった。さらに、「グローバル化が進み、学歴の有無や出身大学や性別、国籍すらも自分の一生を決める要素にはならない」とも語り、自分が何者なのかという問いを常に掲げ、世界の多様な人々と交流し、自分を磨き続ける大切さも語ってくれた。その際、人脈を創る唯一の道は「他人のために骨を折ること」であると説かれた。骨を折るほどの痛みが伴うほど相手のために尽くさねば、人脈などは作れないという意味でこの言葉を使われているとのことであった。



十一月六日、桜島溶岩道路において、一・二年生による第六十三回ロードレース大会が開催された。

一年 男子

- 一位 山口 賢助(二六R)
- 二位 有園 世(二四R)
- 三位 徳重 大輔(二二R)

拓こう！ 未来を

文化講演会

一年 女子

- 一位 松本 下綾乃(二八R)
- 二位 佐野 花月(二七R)
- 三位 下野 優里(二二R)

拓こう！ 未来を

文化講演会

拓こう！ 未来を

文化講演会

拓こう！ 未来を

文化講演会